

特集1

台湾紅茶 縁つなぐ

新井耕吉郎の偉業後世へ



台湾といえばウーロン茶のイメージが強いのではないだろうか。食文化も盛り上がっている台湾では、独自の製法で作られている台湾紅茶が存在感を放っています。「台湾紅茶の父」と呼ばれ、台湾紅茶産業の発展に貢献した利根町出身の新井耕吉郎の偉業を紹介します。

台湾紅茶は、台湾で栽培された茶葉を使用して作られた紅茶の総称です。1895年頃にインドのアッサム地方からアッサム種の苗木を持ち込み、台湾内で本格的な茶葉の栽培が始まりました。利根町出身で農業技師の新井耕吉郎は、日本統治下の台湾において紅茶の栽培や研究、普及活動に一生を捧げました。

耕吉郎は1926年に台湾に赴任。紅茶生産に適した土地を求め、世界中の茶木から台湾に合う品種を探しました。36年には、中部の湖「日月潭」北方の盆地が紅茶の一大産地になるとして、魚池紅茶試験支所を設立。斜面には茶畑が開かれ、セイロン式の製茶工場も創業を開始しました。

41年に台湾総督府農業試験場技師となり、太平洋戦争で資金が逼迫した過酷な条件下にありながらも、

培ってきた実績と経験を生かして研究を進め、独自の台湾紅茶を作り上げていきました。現地で46年に死去しましたが、台湾の同僚たちが継承して紅茶産業を発展させました。功績をたたえ、現地には台湾の実業家によって胸像が立てられ、同時に日本にも胸像が贈られました。

昨年4月、耕吉郎の胸像が市内の墓地から園原運動広場に移転され、除幕式が行われました。市内にある耕吉郎の親族の墓所内に2009年に建立されましたが、より多くの人に知ってもらいたいと、園原区や老神温泉観光協会、親族などが協議し、市が管理する同広場への移転が決まりました。利根町住民などは昨年6月に

顕彰会を発足。耕吉郎の偉業を引き継ぎ、地域活性化や台湾との交流につなげていきます。



青々とした日月潭の茶畑で茶摘みをする



新井耕吉郎。紅茶産業発展の功績は、今も台湾で称えられている